地方は復活する：北海道・鹿児島・沖縄からの発信

松本源太郎[ほか]編著
日本経済評論社
2011.11

本書は日本列島の外縁に位置する3大学院研究科が、「地域と経済」を看板に掲げているところから始まった「三大学院共同シンポジウム」の成果をまとめたものである。2001年12月から絶えることなく交流と研鑽を積み重ねてきた。各研究科が得意とする地域の産業・社会・文化を取り上げ、互いに学びあう過程で、長い歴史の中でわれわれの地域はグローバルな交流の先端を担い、それらの積み重ねがわが国の近代化・経済発展の礎であったことを強く認識するようになった。

財政の再配分が行き詰まり、地方で顕著な人口減少と高齢化という状況で、しばしば目にする「中央と地方」のような2項対立的な論調ではなく、地域が果たしてきた歴史的役割、地域の歴史が積もった地域の多様性と価値を軽視すべきではない。また、地域が抱える固有の課題でも、その解決に向けた一般理論、グローバルな広がりを意識した政策的検討が不可欠であろう。

北海道・鹿児島・沖縄いずれの地域においても活性化の取り組みは、一見多様ではあるが共通項があり一般性がある。われわれは、多様で地域固有の取り組みに流れる通奏低音が、固有の歴史とグローバルな交流であることを再認識することになった。当然、地域の抱える課題を理解し、その解決に向けた戦略・事例を展開するにあたり、地域の「陰」の部分を剔抉するだけではなく、地域から発する「光」となる取り組みに着目して本書を纏めた。

第2開架閲覧室 [341.1 ‖ C43]

松本源太郎（経済学部教授）

アレンスキー：忘れられた天才作曲家

高橋健一郎 著
東洋書店
2011.10

アントン・アレンスキー（1861－1906）というロシアの作曲家をご存知だろうか。大作曲家リムスキー＝コルサコフに師事し、チャイコフスキーに影響を受けると同時に、ラフマニノフらを世に送り出したアレンスキーは、師と弟子が偉大すぎるために影が薄いのか、あるいは死後すぐに前衛的な音楽が世を席捲し、名声が確立する前に「時代遅れ」という烙印を押されてしまったせいなのか、いずれにしても近年までその評価は不当に低かった。

しかし、師と弟子の偉大な両世代をつなぐアレンスキーの音楽史的意義は大変大きく、また、幅広いジャンルに及ぶその作品は、かの文豪トルストイからも「最近の音楽家の中で一番良い」と大絶賛されたほど。特にピアノや室内楽などの分野は傑作が目白押しで、それは感性の赴くままに書き連ねたような筆致の中に天性の才が煌く、実に味わい音楽である。そんなアレンスキーの音楽はこれからますます注目を集めることだろう。

拙著は第1章で生涯を概観し、第2章でロシア音楽史におけるアレンスキーの位置を確認する。第3章では代表作について解説し、第4章でアレンスキーがどのように受容されてきたかを扱っている。アレンスキーに関する日本で初めての文献であるだけでなく、最近ロシアで明らかにされたばかりの諸事実についても触れている点で、拙著は世界にもほとんど類がないと自負している。アレンスキーの知られざる魅力の一端に触れるきっかけを生み出すことができれば、これにすぐる喜びはない。

第2開架閲覧室 [762.38 ‖ A68]

高橋健一郎（外国語学部教授）